



□特集「生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会」

□紙面の構成を変更しました。

□初春を詠む句会

□トウニン行事を学ぶ

秋田県生涯学習センター(編集:社会教育アドバイザー)

特集

平成29年度 秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会

人づくり・地域づくりを推進する 生涯学習・社会教育の体制充実を目指して

平成29年12月7日 会場 秋田県生涯学習センター

基調講演



全国社会教育委員連合
副会長 坂本 登 氏

人づくり・地域づくりと社会教育 ～その推進体制の充実に向けて～

基調講演は、「機会の提供、プログラムは出口から」、「社会教育スタートの契機づくり」、「社会教育への投資効果」、「社会教育体制の充実に向けて」などの視点から社会教育の核心に迫っていく内容でした。

特に、「人づくりは、経験の重視が大切であり、学習成果を生かせる場や体験機会があってこそ、プログラムの存在意義がある」ことや「地域づくりは、血縁、地縁から知縁へと住民のつながりが広がること」、「多様化は個別化」、「情報とは、情(なさけ)を報せることであり、AIにはできない」、「地域創生は、社会教育の実践によってなされていく」など、示唆に富む貴重なお話をたくさん伺うことができました。

交流タイム

「行動人」活動展示

高まる興味・関心
広がるネットワーク



研究報告

「あきぎん長生き学校」
企業との連携事例

※報告内容は、裏面の
「ミニセミナー」に掲載



事例研究

「持続可能な地域づくりを担う人づくりの実践事例」

発表者 河田美智子 氏(「アミューズメント ぷらざ」事務局長)

鈴木健二 氏(湯上市立天王公民館長)

細井才智 氏(横手高定時制「青雲館」教諭)

コーディネーター 坂本 登 氏(全国社会教育委員連合副会長)



河田さんからは、元行政職員としての人脈やノウハウを生かした組織づくりや地域活動の経緯、鈴木さんからは、大学生ボランティアと一緒に進めてきた「寺子屋てんのう」事業の経緯や公民館の役割、学生からのメッセージ、細井さんからは、学校と地域が一緒に行う避難所開設・運営等に係る具体的な活動や訓練の様子、生徒たちの変容、地域連携の深まりなど、皆さんの実践事例が紹介されました。

会場からの質問や意見などいただきながら、坂本コーディネーターからは、「三つの事例とも、将来に向けて変わっていくべき点を示している」、「子どもや若者の育成を通して、個人と社会の関わりについて考えていく必要がある」、「学校と地域の連携という点から、地域がどう学校を応援、支援していけるのかが大切」の3点でまとめていただきました。



「美の國句会」では、俳句の吟詠を通じた短詩型文学の知識・技術の向上と会員相互の親睦を深める活動が5年目に入りました。49回目の開催となった1月13日は、当センターに9名が集いました。

武藤素魚先生から「互選句会」のお話があった後、先生と会員が(ド素人の小子も飛び入り参加)、和気あいあいと一語一語の感触を確かめるように披露し、合評し合う楽しさに引き込まれました。また、活動の合間には、句友同士で句のイメージや言葉の使い方などについて、真剣に語り合い、切磋琢磨し合う学びの姿が印象的でした。

虹さんぽ

地域の伝統「**トウニン行事**」を学ぶ

男鹿市立船越小学校

1月19日、船越小4年生の授業にお邪魔しました。地域の鈴木誠一さんと米屋兼男さんの指導で太鼓を叩いたり、横笛を吹いたりしてトウニン行事のお囃子の体験中でした。どの子の表情も真剣で一生懸命さが伝わり、やり終えた後の満足感も大きかったようです。

「八俣の大蛇退治」の故事と八郎潟周辺の農漁民に伝わる水神信仰との習合した重要無形民俗文化財の東湖八坂神社祭「トウニン行事」。耳に残る太鼓と笛のお囃子は、子どもたちが地域文化伝承の大使となって未来へ持参する「ふるさと手形」となりそうです。



ミセミナー

企業との連携事例 ～「あきぎん長活き学校」とのコラボレーション～

＜ 12月7日の研究大会で報告のあった「企業と行政との連携事例」の概要を紹介します。＞

秋田銀行

課 題

学生登録者の偏り
「長活き」運営体制
外部との連携模索



あきぎん長活き学校 × 生涯学習センター 課外授業

秋田が誇る健康パワー！！

～こんなにすごい秋田の発酵食文化～

「いぶりがっこ」を軸にした発酵食文化を学ぶ

成果

シニアと若者が秋田の文化や風土を一緒に学び、将来に向けて新たな知恵や工夫を出し合う可能性を感じることができた。



行 政

課 題

若い世代の行動
人育成に向けた
取組の推進

七色

昨年の相撲界の出来事は、改めて武道の在り方を再考する機会となりました▼1988年ソウル開催の第7回世界剣道選手権大会決勝は、気攻めと理法の日本とスピードとパワーの韓国による激しい攻防でしたが、接戦の末日本が優勝しました。韓国の敗戦が決まった瞬間、会場内は判定を不服とする怒号やブーイングの中、空き缶やゴミなどが宙を舞いました▼日本の剣道が世界の「ケンドウ」となる道のりは遠いと実感しました。しかし、一方では防具や竹刀を丁寧に扱う様や立礼、座礼の身のこなし、そして体格や力に頼らず気剣体一致の打突を目指す試合運びなど、遠目で見えていても凜然さを感じる外国選手も多くいました▼武道では、対峙する相手とのあいだに物理的な「間合い」と時間的・形而上的な「間(ま)」が存在します。間の字源は、門のあいだから月の光が差し込んだ状況を表す「間」だそうです。この月の光、世代を超えて技の理法を学び合う人たちの道を照らすとすれば、まさに浩然の氣に通ずるものがあります▼かの外国選手が剣道を志したのは、この月の光に魅せられたのかも知れません。